

保育者になったころ (1)

保育の原点を体得する

吉村真理子

とにかくメモをとることから

昭和二十五年ごろだったでしょうか。それまで、中学、高校で働いていた私が、ふとしたはずみで東京都の保育園に勤めることになりました。突然の辞令で、といっても責任は私にあるのですが……。保育試験をこっそりうけてみたら何の間違いかパスしてしまっただけです。よほど人手不足だったのか、即刻東京都の採用試験を受けるようにと通知があり、またしてもパスしてしまい、有無を言わず辞令交付

となったという次第です。

恐る恐る勤務先へ行ってみると、そこは兵舎を改造した木造の殺風景な建物でした。戦争の傷痕が人々の生活に陰を落とし、戦災で家を失った家族が棟割り長屋のような兵舎アパートに住みながら必死で働いている様子でした。身なりこそ粗末でしたがその子どもたちの何と生き生きとかわいかったことでしょう。

私は病弱であったため、敗戦間際の学徒動員で軍需工場ではなく、農村の託児所に行きました。午前

は実習、午後と夜に保育の勉強をするという生活を送りましたが、それはたった三か月間のことです。

そのような私にとって、保育所の運営は初めての経験で、日課や指導計画はもとより、今、何をしたらいいのか全くわからないままに最初の一日が始まりました。

先輩の他クラス担任の動きを見、まねながらやると一日が終わったのですが、何と慌ただしく、しかも、何と長い一日だったことでしょう。その日得た教訓は、明日に備えてメモをとっておくことでした。時間帯とおよそのプログラムを走り書きでメモします。これで次の日はある程度の見通しが立つので、余裕をもって子どもと遊べます。次にしたのは、自分用の覚書を作ることでした。その日、記憶に残った子どもの様子をとにかく書いてみました。ノートに子どもの名前のインデックスを貼り、帰宅

してから思い出せるエピソードを記入していきます。

園には別に保育日誌があり、その日にあったことを記入することが決められていました。しかし、提出しても点検されることもなく、読む人はいないことがわかりました。それなら気軽に書くことができます。その日の保育で気づいたことや、心動かされたことなど一つを取り上げて感想を書いていきました。書いた時には思いも及ばなかったことが、後日読み返すたびに新たに見つかり、疑問が明らかになっていく過程が保育者の成長かもしれないと、ひとりで楽しんでいました。

子どもの姿からのスタート

後になって考えると、知識も経験もほとんどないまま現場に入ったのは幸いだったと思うのです。な

ぜなら、何の先入観も予備知識もないので、「本日の活動のねらい」や「保育上の配慮」などにとらわれることなく一緒に遊び、生活上の世話をすることができたからです。今日は何をして遊びたいのかはいつも子どもたちが決めていました。一緒に遊びながら思いついたことを提案したり、遊びに必要なものを探したり、なければ作ったりと、技術は教えたり手伝ったりするものの、立場はいつも対等であつたような気がします。

つまり、遊びは子どものやりたいことを優先する、生活上の世話は、こちらがやってあげたいと思うことをするというものでした。手足が汚れたら「洗ってきれいにしようね」と言い、自分でできないところは手伝ってやるのは、誰もが子どもに対してもっている自然な感情です。明文化されたねらいや日案にとらわれず、自分の感覚を頼りに保育を進

めているうちに、一人ひとりの子どものことが少しずつわかってきたように思います。

三歳のAが始終まわりの子どもたちに突っ掛かっているように見えるのは、他児の遊びに興味があつて一緒に遊びたいのに、まだ言葉が十分話せないからだということ。Aは母子家庭で、母親は遅くまで働いているため、Aにゆっくり話しかける時間はとれなかつたのでしよう。また、Bがいつも部屋の片隅でじっとしていて皆の遊びを見ているだけなのは、朝食を食べていないので空腹のためだということも。家庭の事情もさまざまでした。

戦地から復員して就職口が見つからず、競輪やパチンコにうさを晴らしている父親に代わり、一家を支えている母親たちに、私たちは何を要求することができたでしょう。衣服のボタンが取れていれば付け、ほころびを縫ってやり、汚れのひどい髪をシャ

ンプーし、空腹そうな子は給食室にお願いして何かを食べさせてもらいました。

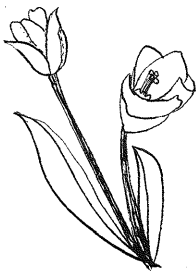
一方では、いち早く戦後の復興の波に乗り、着々と地位を築いていく富裕層も出現しました。貧富の差が激しかったのですが、保育所の中では子どもはもちろん、親同士も何のわだかまりもなくごく自然に付き合っていたのが救いでした。

そのうち、保育所が家庭生活を補完する所であるなら、日ごろ家庭で接する機会の乏しい子どもたちに美しいものと出合わせ、文化的な生活環境を整えてやりたいという思いが湧いてきました。仲間の保育者たちと相談して、当時売り出されたビニールクロスを食卓に掛け、あきびんに庭の花を飾るだけで子どもは大喜びです。食事時のお行儀がよくなったのは言うまでもありません。環境構成の大切さに気づいた職員たちは、自宅からお気に入りの額絵や人

形などをもってきて飾ったり、手持ちの絵本を持ち寄ったりしたものです。

勉強や研究の必要性を感じて

後に、保育者養成校の教員になり「保育原理」や「保育計画」などを教える立場になった私からすると、戦後の混乱期とはいえ、無軌道で矛盾だらけのスタートに思えます。しかし、これが私の保育の原点なのです。もしも、その当時、理論から出発して立派な指導計画を立てていたら、さつと子どもたちを自分のねらいにあてはめようと熱心に働きかけ、



一人ひとりの要求に気づかなかったかもしれせん。

最初の一、二年は自分の記録を整理して分析し、それをもとに次の計画を立てていましたが（現在もそれは基本的には正しいと思っておりますが）、さすがに三年目頃からは持論を補強するために勉強の必要を感じて専門書を読みあさりました。そこでまた新たな世界の広がりとお深さを知って、ますます保育の魅力にとりつかれたように思います。

当時は現在のように研修の機会もありませんでした。たまに企画される運動会やお別れ会のための実技講習会に参加させられる度に「保育内容とはこんなものではないだろうに」と、ひそかに疑問を感じていたのを思い出します。「こんなものではない」のならそれは何なのだろうかと思いを巡らせている頃、東京都の公立保育園研究会に参加しました。

「実践記録を持ち寄り、そこに現れている子どもの姿から発達の特徴を知り、望ましい保育内容を考えていこう」という共同研究グループに出合いました。一人で考えあぐねていた問題を語り合える仲間ができたのです。たくさんのお優秀な保育者たちからどれほど多くのことを学んだか数え切れませんし、指導してくださった先生方のアドバイスに「目からうろこ」のうれしい衝撃もたびたびいただきました。

そのうちに、保育内容は人間が生きていくために必要なあらゆることを伝え、人生を楽しむためのさまざまなことに興味をもたせてやることではないのか、と考えるようになりました。つまり私が今まで親にしてもらってきた方法を伝えることが「基本的な生活習慣を養う」ことになるのです。そして、子どもどもの時におもしろくて夢中になって遊んだこと

や楽しかったこと、うれしかったことを思い出し、あの家庭の安らぎの中で経験した心躍る刺激的な生活を楽しむような保育内容をつくりたいと思ったのでした。

そういうと聞こえがいいのですが「何でも保育の糧になる」という大義名分をかかげれば趣味も遊びも仕事の栄養になるのですから、こんなに良い職業は他にはありません。音楽会、美術館、演劇、旅行、ハイキング、読書の幅も広がりました。戦後から立ち直って、そのころから出版され始めた絵本、児童文学書にも夢中になり、評論集もたくさん読みました。

後に勤務することになった大学の図書館でなじみの本を見つけ、改めて読み直してみた時に、どの道を通っても行き着く先は一つなんだと妙に納得したものです。私が実践しながら回り道や行きつもとど

つして長い時間をかけてたどった道は、それらの本の中に見事に集約されていました。ここに書かれていることは、あの子どもたちの育ってきた多様な道であり、その道は一本のように見えても多数の異なった糸が縊り合わされてできたものであることを知っているから、書物の中の一言ひとことがよくわかるのです。

もののはずみで保育の世界に紛れ込み、延々六十年近く関連する仕事を続けてこられたのは本当に幸せで、他の職業にかわりたいとは一度も思ったことがありません。私にとつては、毎日成長し続ける子どもたちと毎日新たな出会いをし、日々新しい保育を創造していくことほどエキサイティングな職業は他に見つからなかったからだと思います。

(元松山東雲短期大学)